平成15年分野別研究組織　研究成果の概要

スイスの視点から見た西欧経済学の展開についての社会経済思想史的研究

A study of the development of socio-economic thought from the Swiss viewpoint

喜多見　洋
(Hiroshi　KITAMI)

本研究は、アダム・スミス以降の西欧経済学の展開について、当時の大国であるイギリスやフランスの側からでなく、スイスというヨーロッパの小国の視点で社会経済思想史的に考えてみようとするものであった。この時期のスイスには、ジュネーヴが含まれていなかったり、皇帝ナポレオン1世によって一時エルベティア共和国とされていたりと現代のスイスとはかなり相違がみられるが、そこで注目したのは、ジュネーヴのアカデミーの教授P.プレヴォや歴史学者であり経済学者でもあったシスモンディ、思想家E.デュモンといったジュネーヴの知識人たちである。

本研究は、彼らの知的交流を糸口として分析を進めたが、それにより明らかになったのは、スイス、なかでもとりわけジュネーヴが、西欧経済学の展開において従来考えられている以上に重要な役割を果たしていたということである。現在利用可能で確実な資料によってリカードのジュネーヴ訪問時の詳しい様子を検討したわけだが、それによれば過剰生産の問題など当時の最先端の経済学について熱心に議論が行なわれていたことがわかる。また、当時の出版物に目を転じると、P.プレヴォによるマルサス『人口の原理』の仏訳やシスモンディによる『商業の富』、『経済学新原理』の出版は、マルサス思想の大陸への普及であったり、スミス流の経済学が大陸に普及、浸透する契機となったりという形で、当時のイギリスの社会経済思想をヨーロッパ大陸に広めるのに貢献している。デュモンにしても書簡や翻訳を通じJ.-B.セーの経済思想とベンサム功利主義が接近するきっかけを作っている。

ここで行なわれているのは、スイスを拠点としたヨーロッパ規模での思想の交流、融合、発信ということであり、この時期のジュネーヴが、当時の新しい社会思想や知識が交流、融合、発信される場所であり、当時の英国の新しい社会思想や科学知識がジュネーヴ人たちの手を経てフランス、ひいてはヨーロッパ大陸に広まっているのは確かである。その意味で当時のスイスは、貴重な知の交流点であったということができるだろう。

なお本研究の成果は、「転換期ジュネーヴの知識人たち ―― スイスの視点からみた西欧社会経済思想史の一齣 ―― 」として『大阪産業大学経済論集』第6巻第3号（2005年6月）に発表された。